源氏小うえ

源氏同録巻之四

二十 [illegible]

廿一 [illegible]

廿二 [illegible]

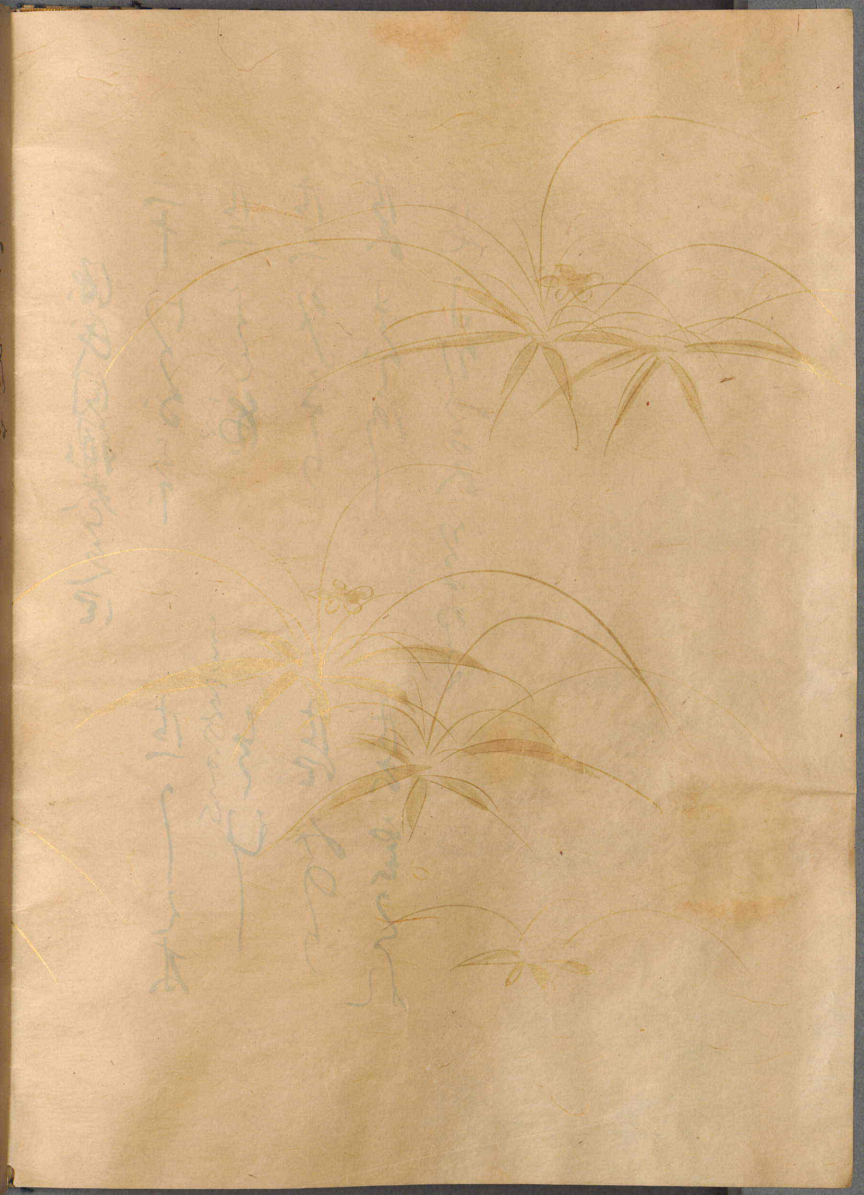
廿三 [illegible]

廿四 みのり

廿五 [illegible]

廿六 [illegible]

廿七 [illegible]



二十　若菜上

花とさく若菜の色しる事いまそしる始
ねのうちはひきかへの大ねの小菊して
いはしり四十くわん二てしまうを源へ
ま正月廿三日り孫の日源氏のかみの
まく孫の日のいはひよりうけ給まふ
めてたくかくてかくさかりむつ
つの哥

わか葉さす野への小松をひきつれて
もとのいはねをいのるけふかな

とよみ給つり云条の院にはうと
小松もちすゑのよはひまひきてや
ぬるへのまつるも物しとはむへき
とよみんかはし給へるまけんは源氏の御賀
のんのまかくいはひ給つりしらうは賀
とく四十の年より十にうつるし毎
いしき大臣をとなひはいかとと
のへ一門一家の一大事にいのりとなる
なりられまよりて円(むかつての)の御にまこ
まふゆへなきは称乃日よりそへて給し

ちうみの日とは正月のたゞ祢の日は子
日とて婦人のあそびまうなそなつるす
ありこれまも若菜のあつものありふえ
ゐしさて祝へく因縁のうえたるしさそ
まつりすへをいと祢ひまさりて物をし
くすゝろひまし と源氏のりめ給ひし
なりけるおますゝろひあるとつゝまし
くるしうしとむうつるまあるへし源氏
のけとし四十なれはよそらの玄なと云
まもすへしに賀とつゝるは人のいのちを

のつりまいりてしうきんなり桐葉のう
らはまあしの中宮とうくうへ参り
まひてかくさりし事なり又中宮
ワうしやうまゝのつゆありこきとあり
あうしふとまりし入道きゝはへていう
ありうかしかりきんはよの様ひは
いまみちのりとゆきゝ山よりてこや
このしをめのもとへも小のうのうはき
ミのもとへもこ風くと又うきてのか
とい人くのいのりをしまうしまく

そてとさくる所事ともみんこゝ入て
つゝしてのかせてまつるこ世を深民
けるんしくことすみよし無りとゝ
まいはまいはあしのうへとまうきん
とてみたりし夏ともうけたり入道の
うたり

ひかりいてんあかけさをくなりにけり
しこそかんしよの夏うたりする

と夏わうたりの文をそへそれもいかにも
けんりは夏うたりあしのいもやまと云

まゐりへしこそ法女三のみやとぞ申し
ゝ東雀院のひめ宮にておはしまさせ
まさ乃に中に院のよかさりなくいと
かしこおはしめして六條院にはしめ宮を
あつきそてまつりまふ云てこのゐん御
年四十の二月なりこれそはしまの下に
しゝ末のゐりんのうゝに名をうてかゝ
るゝ大ぬとうゝまひし人なりいつゝり源
氏はかりひまりそとゝふまゐらはるゝ
のよりき日をえらひ云てこの院へうつ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

若葉下

芝ハよりワるゝハいたれおきハれなるゝ也
此是ハ源氏すみよしに寄りすゝ上り
中宮玄宮のワうやまうをすゝといひ
つゝ宮五まてとうくうにはゝ也すゝ御
ちゝの玄宮ハ朱雀院ハ御すてれなし
きなふましとみよしの神のあくさ
ゝ是ハくれなくてむしさきハ上あし
のとゝのあまうへ女御の宮なとおかし
めとまゝにひさつきすひ寄り給ひし

なり此ハ十月廿日の日その程にしたふ
志所くれたるおきよそうやまかうして
そこひとりまひて入ぬるまつらにたる
くしそこて御まつらに車をみる事
祇すまうしまくむしの御戸内名ふ
るのさ御きとゆりてんちるとおひ
出しはるんと御くゐし板もしい女三の宮
とうしん末のちりんれかまゐてまつ
りておりひけうるゆハ上の是より出
隙院にてかとめられるのわかし程

みさまはいにしへの庭までにまゐるとおりし
りんのうしも気りすふまこやのうゑやすふ
称こいはくらりうしらぬ称こをひくらう
かりしくみんとのうらへつりてさつけ
そんとかひへさらく交も立続つり称
このはるまてみとおりてにしとる
みんとすふそのわらり屋まひとなる
おさましかりしかりは井まは
交ゆへそうし力をいさつるなしを
まふそのかしのこと茶

春のゆつき　まり勝この中に
みちかきこ　すのくしら
たしつゝまへしてえのんでのこはえ
めのとに小侍従といひし女房はさうなる
つまなかれてこそひて文をまゐらせたりし
みちのくにをおもひて風のわたり
てさかりのきしひらくなましき
くるの小侍従かもとへいひやりしく
わかさけりしかさてたりかきて女房
と申りしかりしかりしいたの

さりそてんしつれなき事とつくり
くて小侍従やられからしてはすは
あらやまふ法住寺殿をしそのつらせ
ゆきつとなかきひていと大事なか
うしまれし院もひさそうは打なそて
されさりなうしまやらひまはく
いまてあらやそありなりて月とか
きこしまふられとらんしの御事
らそそくなくとうやまや浅へいむしくれ
めよのれしよまうしあひよいうかせ

ふるしかきりひのひて源氏にそしほ
しかれは京にて侍く兄村を須しくか
なしくわひのひしたりけるん風のきを
菊はみへてそらとこり須へにかれは
こそとありしめして河国としみなわ
そやられとれえしきやいは淀とのこ
そそとゆきのふむしありのひとすくさ
めのあかりてはいしわつきしろなきいは
成さって也ききのたれ川さへ帰り
まひすんとし須へて女三の四ゑそり遊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

てりとめさせのふまにさしてのれ下まあ
さみとりのうちやうまかきそうえと
としまきそうそしゑゆうあやし
くおりひのひてにうくゑんなとにうん
もうありてにうんすきはも聞くとか
きそうまままふ為くもあらとうれ中
納言れ申してたまさうにあひそそま
にうんのましならねらひのくうしさる
とうきそうなりゑんしのにんれうら
いうちうりかきゑん小伯位にうくゑんなと

りてきつりてかんてきつきいきちゆ
かのうちより高りそりしかの色のを
とぼんちろうとなふとものもしあり
さうさひりくとするんちりしてなり
ゆりて源氏うりまひて海よりにちひ
そくまつまはいさうこしりて鏡へ
物をひりうこそ彩のそうよりそを
つもりとのうつはりてうふなりて
うりうんかはくとりてそ文いをくか
うなりていうこはうりのその程

のことをみとりのうちやうの文書を称
乃書をあらはしなとしてゐるを付へし
それよりそれんしは人めをかりふくは
あるを後はあひ給ひて人しまぬ所の
ちさしをとあれはもあさましき
なりさてしまうの女楽としてゐることは
女三の文いまさ書りんのうちにあるより
されなり朱雀院の五十の御賀を御子さ
ちつとめをしくさはりまふ此女三のうや
ほとめてまつりまふれんしのりとは

たゝしまゝにさりともきんをかし
まつかんとはしろしのありしよし
給ひてりとしりえさせまへんはまへて
ゆとしろあるかしにとり立てよる
ひるなりしをそてまつり給ふいとさと
まんえくるしひとりまつそしき志ろ
まはへさる人りかしとかめ給ふ
うらくまんきんとて正月廿日ありし
なれは春の夜のとりふかしむ夜はさ
くとしいそてまつりてはかりと

きと女くといふ辺ゆきりの大将殿を
のとまて所ともりとのへて居り
まふ女三の宮のさんの所琴ひきさ所
をまうん女御はさうの所とわりしのへ
はひも源氏はしやうりまさまふぬえは
さりの御子ひまくろの大将の所むかつ
の所もの子これはとおさなくてさう
の御ふさまふさていつまてありし御く
わりしなりを時の所をうとうりとも
よそとふきはまつ女三の宮の所をうち

二月中の十日ばかりの吉柳のもと
にふきたりたしめてうくひそれも風に
もうきまゐへしにくしつひたりみさり
こかきつつまく柳のいとの長雨にまん
それなる風情なり女にはさきの比すると
をこたりき家よりあたりまなる御花
をしきこかきたる夜はくらしてよし
ありて見てのふむしさきの上はたきさ
なとよりに雅まて御うそいあらまりく
あるつきまもふかひきらて花といはさ

くて梅のかをとへてもなを物こしにほひく
きさりきるゆふなるに風のかくるか
中よめ君のよいけかしこう人まれとも
わかれくりてはまてゝ月の花
そこらなるも見えもくしとしけり
ころらすつこまつ心地のうさ
のうしさそこちて称よこうう
おこそひさとうとそてそこゐふ
はへひなしそうろとこくり
こうんな成まこうそすりされつとし

よりてよそへ行くへし又はまたまたら
このうつと云事あるこれは思りんれいを
わりおのうさまりちをてまつる此女三
の文のあひそうしはいそのすち
もなきをしらうのうしいなり朱雀院
のまゝ山まはりしたりしてうつろも
せるひしより女三の文をは源氏語り
まふ思りんれいをも文をすらをしたく
のそこ語ひしかは此女三の文を語り
語へまさてゆりひみをまてよりなりめ

くもゐのうへよそにもおもひやりきこえし
しむひてしこのみ斉
わろくおもひとなむおもはれん
なはしつまきこえつれしも
しかしらせさせ給ととかくのうへと
まいるのなくさめなとはお
きやう人なりふかきよすこのひしたり
小野のわたりのうへいふもしも
あはれなり

廿一　柏木

いまをしは木といふ事月日雲客を月日
星雲りとゝまつゝ給門の末葉にあそ
らふるにはりんのうゝをとりしは木にはへ
そまにはさそりしは木と云なり弁にも
此人をはりしは木とよふそなり柏は人毋三
の文の事ゆへに在まひかきりになりて
いまはのおり大納言になるは人にてなる
事はこひといひけんしすうしもんをか
のめりして酒をしゐくけんらぬけめ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

女三の宮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

といやしきかしハ本よそよりあることハ
の面まひのうちり女三の文かりの大
ぬとうえのひしなり源氏ハ我子なら孫
とも人のかりうん事をかりしてもく
なしのふけ井よそのまくらなしと
まり給ふるもおもしまさと文のふん
のうちそいと行しきの男のうさを
なけきしつゝのふ程よのんもまいのさ
まふも行ましまさとこれもの和のき
のゆへきしさくもうさりと行りき

ろの井てゝゝとゝうしもろなくよ
ゝさぢんゝゝと阿多のうゝをれわ
のゝゝりて四又のんれゝへゝりひく
阿のゝ行給ゝもゝのゝいゝなりこゝをか
の大納ゝゝていゝゝゝもゝひのりてゝゝ
よゝひゝりかゝりのゝりゝゝりれゝ
ゝりの大納ゝのゝりゝゝしてゝゝ雲
井のゝりゝゝりゝゝなりゝゝゝれ
ゝゝれゝゝひゝゝくゝゝくゝひ
ゝゝみのゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝ

いひときて おやまも門さちてうせま
まりさく女三の宮はんちすうしよく
なりまふのけり兵はいつかしく称し
ませは源氏いとあまきまおりしてうつ
きまふいそりのいまひのおりの若兵
を源氏うきいてれて女三の宮の門をへ
人のなきひまはしまりて
たりにかそ○はまれしと人とて
いういまの○の松はうへん
とよみまひしうれ宮いふうてなくまつ

しくかりしてひまつし語つりさこそ
をけしをもんらくも折りしかん思
りんのうえのうやしまは春の法なりと
又おこなけさまひし前は
末のたるのしたくはぬきてさうたに
うそこのこゝろもさなり春の風
とよこ語ひしなりこれをこれあるをて
付へしかゆりくへ いそ〇れ松
なりまにまれし松 いそのいそひ
りゆりおりひ

廿二　横笛（よこふえ）

けまとしこふえと云事かの忠りん所にの
小ゆるさわらるのこやとも一条所にやと
を中忠りんの記しをひて後あれとれ
りひし中のこさかんなれ次ぎりの大ぬ
かの一条のこやへあれかりかたりなるさふ
らひまたもくまいりをふほとまたん
ちなきしもあらを八月なりも八月と
まわりしあくあれきなりしまあこう
きぬく大ぬけこやへまいりをひてきれ

こゝのつより下ところんといつゑのかす文は
はしあそこしてたれめの行わた大
わきりのひくみのみ見人との前れ見
のてよるをしまきて門よりかへとり
出しくろねよすめのふけ絶えてたゑ
わんのこうそのさいまてりちうひて
まいらふはへそてまうんとうしとの
のひしすてわりひ書わりしかさすてひ
きみわんにひきをひきのあとはしいたんよわりの絶えへきこえてとり
たまふきみわんわきたんかくのひてみんとそ円を
よりなくすゝめらへいさひとすひうわ

くもうさもうつされともわらはの家
霧しあさむくらの庵とよいふしの
秋りかもらぬしのこ思ひ那
ゆつきり
よと笛の志人にしふりつゝぬを
むかしくなりし称こそはさせ
とつゝ弄のゆへなりさて此笛と庵にて
をくりおとてたねの門にへそてまろ
つきまふこきなん庵にせいぬんの門笛
とつひそりたねまり御所三条殿よかへ

つまさまひてとうし田とろゝまひし夏
よりんのゝありしなりしをうこまて
は笛はおりふさことにゆりとつひて哥
夢の中にりんれゝ
ふえ行よふさよる風のことならい
すゑのよなりれ孫よはゝへかん
とよむとゆるんしまれいかの笛とゝ思の
よふかりる大ねよはゝへよとなりは井に
ゆゝへまふそりしさてことかりる大ねを
もよとふえの大ねともひかれそのことい

よつさはうつ節からもゆつさり極も
はまさよりりうよなりりふうしも末一
めくりの仏事ふもわやうちうきりか
りもなけき節ひりふ云条院よいさ面く
よわりしめし出り事さへあまはあ道
りかほしてかれ着宮のはうさりと
ふさしく金と百あはんさしことはう
ふはしともいろくよそへはりつさま
まれい人はしんをさしのもわやうちをも
しめく氣よかうしあなさのはんさ

しとはなけきの色よりかんとかりと
又はうきしくおりひの外にも絡とひ
あふそうし金なとつゝあらはへ今とも
ら○なと云事はくるしけきよを
かんなとつゝあを朱雀院のはさより
さけのことを女三の文へまいる絡ふは文
はしおりしく坂は入道の文とかしは入
道のこゝやへまいるしなりは若君
とりもてあそひしおもあひさりしか
そさけのことを云ふなとあへし

鈴虫とて鈴のならひ
はじまりしと云事ハ八月十五夜の
おもしろくすさまじくてありなくあはれ
きなれハ云葉院ハうそつるためるかく
入道の宮のおんもとにて月毎ん
まゐりけれハあんやんさいよろすまちまちて
なかしものなかハよすしけの節や
くるなきされハ入道の宮
おかうとの杯といふことあるりと
かりたてさきすましのしん

ろんし

ちく河りて春のやとりといとへとも

なほとしはしのこれそうりをね

とよとのひし音れなり月くさなく

うりをてこさすしはしのこれなと

いふす

まへし

二十三　夕霧（ゆふきり）

此巻夕きりと云ハ大将の小野まてとよミあひし

山さとのあはれをそふる夕きりにたち出んそらもなき心ちして

とありしゆへなり此巻ゆへよしとて大将と又夕きりの大将もひそかに大将の小野との御かよひけれハ此一条のならしの宮まふくんとけはつふ宿よそのしろ母宮と和一条の宮してわらんいらし人されきを

まゝつゝひ給ひていとく山さとにかや
ゐたりの用まやらしらへ給つゝ所へ入の海
をもまふ方ぬいとうしもてたゝしより
御馬まて出まふみちをしく杜つきに船
の山の出しさすらくあたれなるよかし
はきてまつかれ御心ちをとつゝひまひて
後宮の御うとのみをのまへのをれとよお
をしてみをひさうつきかぬと云毎房
らひ出してなまやうやの事しもの
まふに程なく日もくれてきりつく立

こゝまれのちもしのゝとなみたを
しかとそこらねあつめてんこし
なきかちしてしらこゝひて法師と
しもて長秋いとまりすふそのりしめて
し歌
冬こもり　秋つさ山
はるかなるのしり　しものうへ
そまゝのとし　枯ちて
なしつふ車をさしわたしてはなし
さるほとよあうつきくりまふをのへのえお

つま迎車はあつくしたまへりしくか
りめしてうきなくといひつる人にてあ
さふらひしきふらとしめくうきなみき
みつきとなしめつりんすすふきみしや
きつりんしはなひてしなしはりけしなと
らうひてうつ時のまろれよとも秋のは
なおろしまろつきしと毎夜とふろ
くしきつふさてしもあくしうさ
さうさやかりいなかれていくくらて
ふりしくらりきていけよつくき

まふいてにこゝろつきし文のけさあるり
極も四十九日もかくなくらくはまくふ
京へむ人なりて三京のよと十五日にて
うらひまひしなりみはまをはりたこの
もと云事をこれ人のいてしをこれ
ちもの文のはらひしおねのゑとらひし
女房はこれの文を取のゆりなれはく
きまひし後うらく御そめのしこをなり
りさめをきく九(きゝ)牴(ちゃ)ひきとせて大ね
のとゝひまたしそりしは射面せし

東なりし武蔵よそのひしまきれにほ
しておくしらひしくとのすへしも
のはまたしゆきてこまかわりたるし
けへたまへきしのみうれは小野よ
くるとのしまくりとはそ事も
ありし花の林のはなりしみなへよあわし
とこにしまよろしとものひてそれ
かんよき年なり小野へつきて人と
はかりしのみ侍のみなりくし年
みえん

二十四　御法

此里にのりと云事はしさきれとなるに
たるまりて年ころ多部のかきゆれ
く面ういかりしき大かう出ありそうに
のきゆそうなとありていとそのし
ふかそくかりしめしくにこなともかん
しまさとをそれいくなとおくし面
をかけきゆ乃かう出ハ面ひ十四日迄
にかうしんてくとのくゆりをひなんと
すなり能ちうさとれにうへ

しくきの上
みきわたきみのなりそなのまう
よしみしむらふうへらこえりと
気らつきし
むらひとちらさうはなしした その
のうらくたれとのうのうとと
とわりし斎のんたりはしはなうみうし
事ものこもりしくとそのまひとね
よ篭りくけんわくししとやまふてい
とわききしてさう物かうりの世風さて

みなくしもあらはれまゐらさせ給へ
ほとおかりなへしは三の文とひめ君と
そ物なりそこてまりの人はんまゐらん程
乃まゐあらはれて云まなりの三の文と
ほうへよしへまりて我らなく成るん
時はしそひりすゝのひてしは紅梅とさ
くらはなるんよりとさゝんまゐて
の給へはたるさ御心もいくしかし先
よ成のひて御袖とまさくりて立のひぬ
ありしの中文の御らしの姫君をもしらさ

きのよれ面しなひまて六条院のまつの
うさしさきのよれをうしおゆつりえく
あしの一ふの文とりてとまゆる梅
こそすゑまてもまゐふ兵部卿の文ハ此さ
いまとみのひしなりうてしきに彩
りし筆なく成るへハ中宮いてのふ此中文
まそらの御門のまをとりとき給ひしこと
おきあり中文に剃面しるへハ院御
らんしてかふハいとよくおきあるまふ
めまたも此のまへりていとよくなれく

しきなりしやうもふしきこのこ
とくとうかしとはかなきともれは
風りやうしきこのうも雨
とうんをひしなりて日をへてお
りて八月中旬よりて是をふ院れはて
ゆんのうちかひ屋をへしりし屋とも
是をへしもかさりのゆふはさりきれも
御くしお待さんとて是化はなとあは
ゆりとけるのむしりてな是をひく
いまいとそさおろしきんぬくれのゆんは

よひ夏まか御しともつきまへ給りと曰て
ろなきにうまつりし人さへよりひさく
うさりしおれ目をまつ物のなけれは一
人ありし中く院にはしりてかし
給ひて大ねの君よのかひあるせてこそ
もとこなんせさまふ此大ねしりしの程
かのあしさ風のまされよのそうそうん
すりしにあさかいうるんよふれ物を
なくおりふすていなりしかとも思れさ
くかりひすりくとなしてはとゝひく

なふんすくうらつし給へうけかをとく
くとまりすふまいとひうりさし
そふんらしくむすしさにうふ我さ
ましゐ入んらしてはうるかりし也あり
なくもいまなしまりて七日くの御佛
まものうりなく私かく風をさむく
吹しとりそうかくれは又のあとより
御子乃慈人のおぬしてまり給ふ
いよしへの私さへいまのんらして
めきまし神は家をときそふ

とりはらひしたるのやうにあはれにひとり
つれつれなるひしもはるかなる野辺
見わたされていとゝあはれなり
露けさこそ　　はまにはまとて
おかしき秋の夜はにとりあはれ
としみしみてありけるなけきりみえ
えても出てまつとそまつおもひかき
みえる人ありけるにその母かりすへ
とおもひしめて宣耀殿といてや
らそなかきこしてさらよにいかに祢て

し雲くまはれなけきのゆへそし
秋の下ゑにてとよ秋このむ中交れ
にはりひかり古来の交と不のはじとあ
秋このむ中交
かまはれろ雲へとりしやなれへの
雅りうて海とくめさりけん
はむらさの上ハ雲の明かれもあてさ
まひしんまくよくまりまふはとんを
てそれはへしまんし
のはりまし雲井ありしかつりまんよ

いまあさてあれはゆふかねよふ
江のりまいそくいほりまてゝ年と経し
ましれのかしさんとすへし堀中
くことことをかし
いほりも
まれの
しと
なり

二十五 幻（まほろし）

此巻はまほろしと云事源氏の御哥のひよ
なけゝく紫のうへをおもひてそことおもひ
おほそらをかよふまほろし夢にたに
みえこぬ玉のゆくゑたつねよ
とよみ給ひし成なりかくれ給ひて又の
年のはるのひかりとみえ給ふもえん
ふとおほしみたれ事とおほしかなしみ
られなから三の又のみちのかたき紅梅よ
うくひすのなきてまいるをおもひそて

[illegible]

いまはとてあらし屋をてんなに人の
こゝ海とゝめし喜乃うきこ○を
かたる世都の宮まつりて紅梅の下にけて
ふきまふりきんし
家屋とは花りてもやを人りかし
なふしり喜乃そのは称きつるん
宮うらなきこくをて　世都の宮也
りとゝめてきつるひなくたるの
花のそとらといひやなくすへき
あまれなりしゆんなりまかりしの喜かる

その紅梅桜なしつかへしあさ
ときまりなりていとあはれにかなく
はなりたるねのあまつりそまひてなれは
むしりやうのひしよまはれ候かりしさ
そのうらなくしまと
なきひとともの心ひとあはせしめふ
わきてやころさんゆへあれ
又聖武のまつりよいみしうのこれあまし返
出くさいしまれは中ねのあとつか安居
しまれのとうふしふれかりけり

人なり源氏ものひくおりひ給ひしかと
もおさなきよりおりしそてをひし
うはとのかうよおらそてまつりてう
ちとけ給ひてゐさまんとあれはそひ
人なりハ給んしるさまとすとやお
りしまんまつりの日うて称きらおへ
おもしましそりおさありうらはさ
りしなりあつひと給んしていふとや
けなしてけとれよそれとの給へ中ねの
君

さもこそはよるへの水にみくさゐめ
けふのかさしよ名さへわするゝ
とやうれはそれりしあうかりし事也
つくしのこせちも源氏
にまくしてうれしくしと夜の月を
がしこ御さけのこゑする
と帥ゝ渡ろのよひふねも多殿よ
かさるとてもしのうねのするさへれ
ほしまれて時さしなくうらんのみ
七月七日よりはゐわさひもありあひ

ある人もあるしうたをとうれせしかりきり
をおりしめしいてし前栽（せんざい）の露はしきく
まさりしのとりとりてみんまさ
るれは出すひて源氏
それはさのあふせは雲のよそよ見（ミイ）く
まれの庭より露そとさそふ
とうしやまきをふくて八月十四日は四夜
くりなきはよ（ミイ）下いもあしてうらく
のまんそうとうさとうやしまうりし
を清書しそてまつりをふ中納の君

ゑこゝろなりみさいさゝもなさあと
ろふまはすふのそてしいみん
と中ねの恋のみさよかさそりしをと
ほんしまろ御心の中さしそれなりま
め九月九日りいさきあひそろ菊と綴ん
してもひらたりしよかれ秋りまとか
なりひのまかむを月よい大りとの尾も
まれまさくあきれもやうてありみいか
とうらなりめて幼と云哥とうきはひ
なり十一月廿のありよいへしまんむち

しのぶるあかしめし出て日かけも志
らしとしらひかふぶかいとけ語りんもちろ
さぶんかり御まへま人二三人さふらゆ語
ひてぶ夜だ（うぐ）とも聞きとてかふまかれと
まつ迷のわ所をよりそてまつり語
ひまつ中かりかれ御手なりはしまゆ
ひあらゆてそありまつそくしとの中
なりぶすを付なしかふあしいまゆの
うさゆんなりとけ世なうしのぶきを
そまりもなけきかひかんよとしあ

て語つるりあいなかなきとまこう
しかひて
たくのふちとかし人をたふとて
おとをんぶしも程まとふ那
いかなしむ道をてりしやありしめしけん
まさあつめひきゆひてうき付語へるけん
しこまりふかき語つるさいつまと
絶本りをうつりまかき付てみる為
勢のふとみんてみり
うきつめくみるをかひなしりしかま

れなし雲井のかけりともなれ
ところのひしかは中将のひめみこ
やんごとなかりしきはのひとり
孫のいま孫王の人はさらに侍ら
まゐらんとする人てなれはまりてさて
にてさふらひしにことすくなきす
は雲いらしくかゝりてさしきこゆ
なきはうつし火たえしてゆゑときこ
えてさふらふのさすまゝにおほひ
もの中にも入道の宮へまゐりそめ給

ひしゝめんりしも色まいてしたい
こりしともあらさなのまさ面とこ
とふかれくれりしそりそりし様ん
志きしさき中しも雪かりそりし
あらさそら面とひしは力に
りんらりそりしまたさあらしそり
神とひき面しのひしありけいるん
世しりえうんと三川のとさまさしはあ
らしとしむしとしまとくりみし
まふ川神のうへりむちりそりしふり

あらしになきことにきこゆるをさしのひし
く〳〵の袖まんせうくゝろみゆる梅も
たえてかはるゝかたなくしつらしと
おりまゐらせ給にいとつゝみ給
てはいさいかまふそ御かたらいく
むかしなかりしそれしめきこと
うさのはしてよろつまさること
きえてのいのちもあれて雪風は
いかなく梅をおもふらしてん
ときゝおひしるそ雲のうへの御かたり

なら正月のひきて物と書部なとに物
まて調とうせのひくまり源氏
物ありしてもて新月日も思ふ世に
やしもつかりもなつやはきなる
御法幻二書ハいはまてもありしなれとも
ゑつきなる

ことなし

其六　雲漢（くもうれ）

清宮よりふかうさしてたかき岡前にして兼家
利光源氏と申せは雲かくきのよりなり
其七　かりの大鳥は　よりは兵部卿は　なりは
清宮か御うとゝにかりは兵部卿は云事は二
の文と申てひしさきのよ御しなひて
てまつりて梅さくらゆつり給ひしはあり
しの中文の所にもし源氏の所まこの文
まんかくし給ひては兵部卿の文と申れ
こちらしくきくはんとすやうにうつ

しきれたりしまいはるりかかりたれと
さかの女三の女のワラウヤ人めは源氏の
御子内ことはしは東の大納言のこそ
しは君もかんつくなともかんしきい
ちんかんにかとさかひしにより資院
まてせさ当かに源氏なに事もかとを
やかひしうそよのれはそかろうそ
院よのこさふひていとうしきなく
おひさらかひきうとのにうかうはしく
てこの世のかりなしくすあうりを

こそれし三のやうゝのひてこ
ましこのまて春はまかれの梅とこし
ゆかりけき夜香花そらゐるとおつ
め書となりしこ秋をれゆかち
こゝ園とよりこそ紅蘭まてもわ
ひとあけめ御へとのつゝれかひう
ふしくれてして人ゆり兵部卿宮と
そのもちはさそ源氏の御後よりは
そまれはさ人の心ともみえし御ひ
しられかりしまのくもてきひし後

あるん為しやかせうなとの世より出
をひて二をひかとけとらいせしかこ
とくなりされは雲くきりふまれ
まへしかりふと云事まはかりひあり
めしなと云事まへしかりふは
のつら

かりる旬ふなと

いふへし

御門なとひ
はきさきかくてつゝす
御かとのうちうち生一わよ
わきさんのことくいりうきうや
とつふ弁のなりけひきう侍大ね
とそ侍よれしとうく関白まうしひ
そうしむろつのほうるよワう君三
人婚君二ところおろし尚えくや
まひてうちよいらくしくたえしき
見たまうりり大ねいまて宮位の侍従

しておやしろきあの君とんのけ
りしひまひしうりさし殿へかへして姫君
ゆかしくられてとき侍りてねさな
りしとおもひてけりさひまて
してよろしたりよれなしとろみ
そりのかしく雲井のりぬ〻ぬ〻な
蔵人のかねとひしもこの姫君とん
けておつ文くれりこの姫君たら
さくらとうけれまてし碁(ご)をうてやすひ
しとりくてしんとはくしまつ竹

川は碁（ご）と云ましけうしろなるへしそれ
とし葉

玄のかくれ　碁のちまけ（かひこゝ まけかふ）
それのうをね　かいまうん

なとをけへしされとも此人くれと
ひもつくつ事よりてひめ玄きいや
むかんつきつりてまうこやなとしき
なきまふ

いもうとの
玄関へまいりて

[illegible]

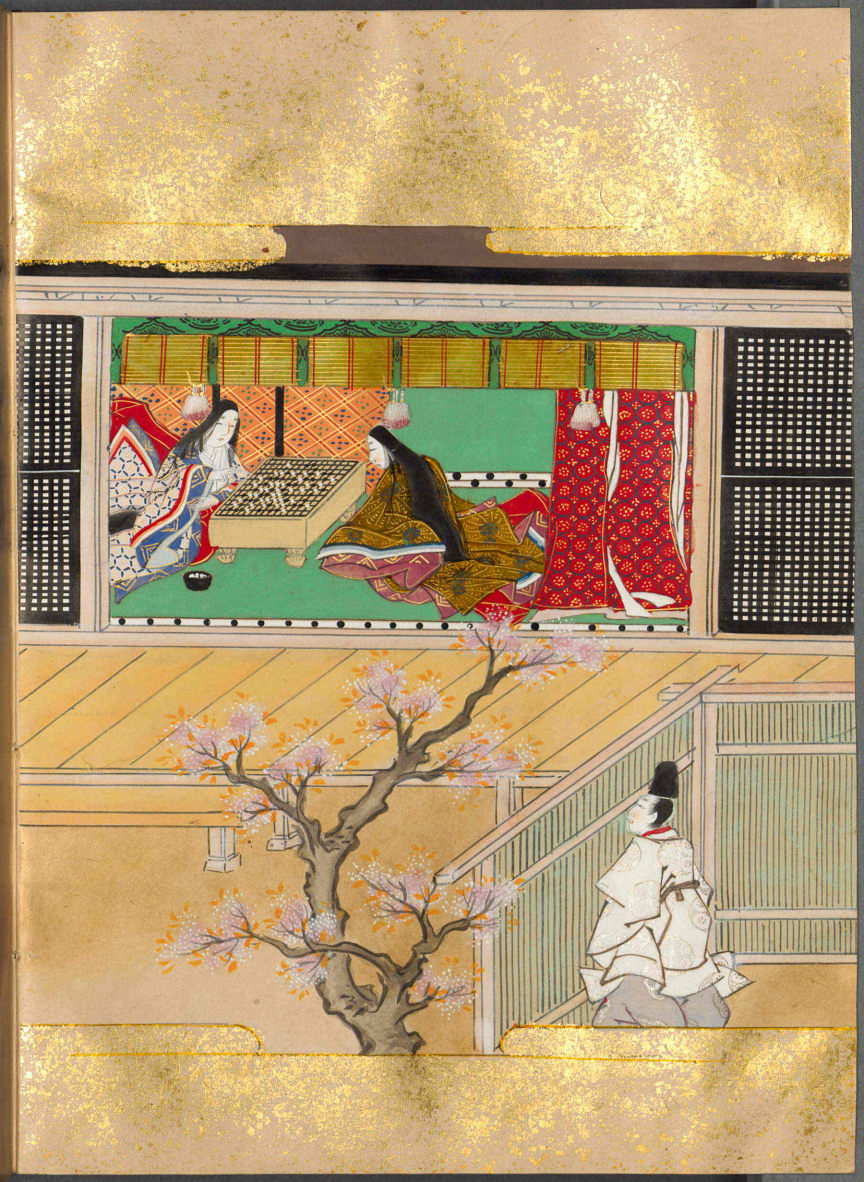
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

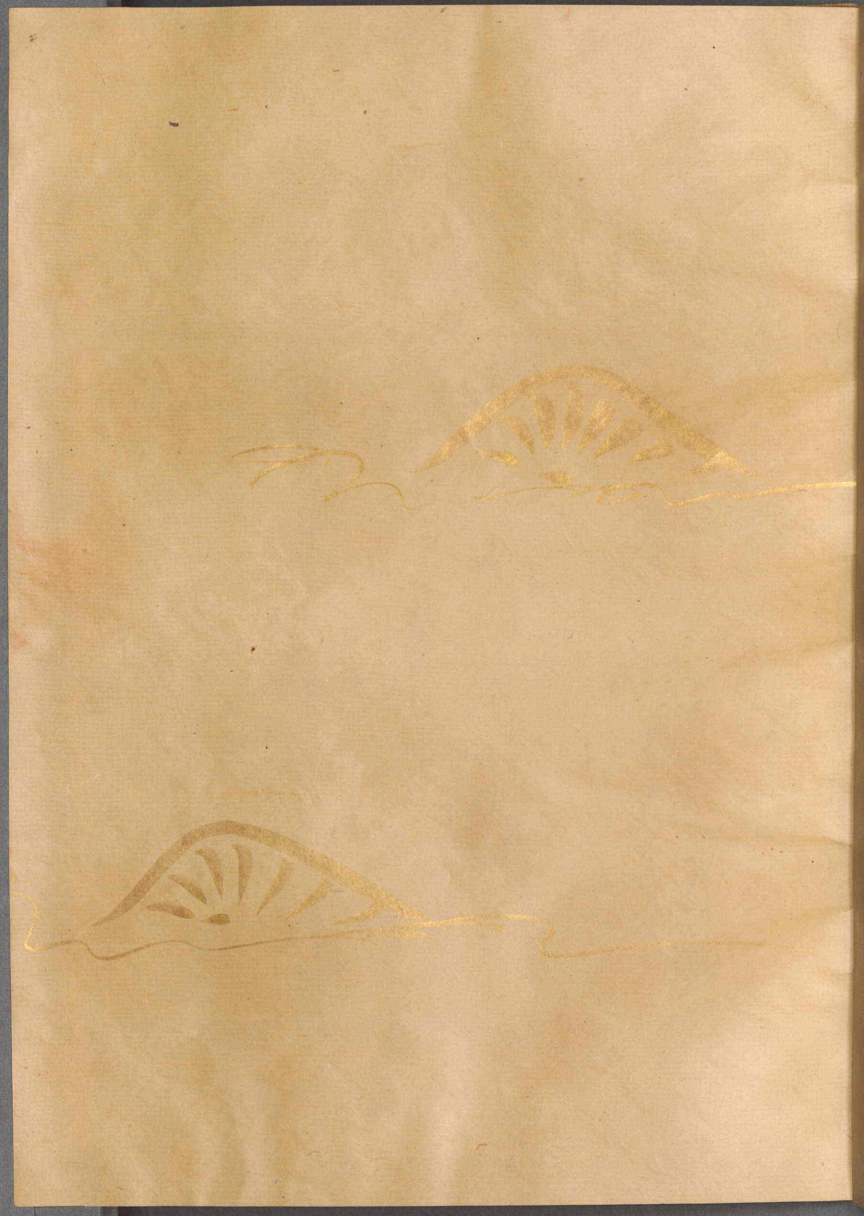


紅梅（こうはい） なゝひ

此巻こうはいと云事はにほふ紅梅也
大納言としゝかはしき木のこと大納言
のかくしそうし世のおほえいとうかゝ
よ中もんもへかわりて時の人にてなし
まり大臣となり源へ(?)ちゝいのかゝ
しもはしく人と云なりへしあれのきいきく
うたねのしきあかいのひとりのきいつ
さし人のうそしる大臣きるかゝ風
きこくやし姫君わしう若紫の文

のみれこそ盛しとめてきものひ
く漢に作りてしこゝに文のハこと見ん
まひめ悪一としろわれりまてけ治
こ乃みくよなくなくそこそ得
さこそいありこしまと梅の花弁
とやなり桐こそいとゝなりけれ
文太作るこの梅のえこの花のうき
をかりてひとのこみいまこそ
いさんとのかしなるとゝいひてふ
かの当初てのりへくれかひのうとある

よ又かきてをてまゐりまゐ時の弁
ら海ありて風のまゐれをその極
まつうかひをのとしすやあるべき
と申されそりしなり文いとゆうあり
ておりひまひはひよゆゑなとあり
となりまことしき事もなく五十四帖
のかかふすりとてにかつるまことと
ろを語り絶えかゆくつれさるといふと
ともありその中にこうたい行川とも
いつり又行川をまつふ事もありた

なし事なれハ論ニ入ハ

すとなれ